

第 2 回下水道政策研究委員会での委員意見の論点整理

■ 「新下水道ビジョン（仮称）のイメージ（案）」（資料 3-2）

- 今までの下水道による「社会への貢献度」を再整理すべきではないか。
- 現時点における各自治体の下水道の整備状況が様々であることを前提に検討すべきではないか。
- 「飛躍的進化」に相当するものを具体的に検討すべきではないか。
- 「飛躍的進化」は大きな転機でなく「循環のみち」の中での飛躍ではないか。

■ 「新下水道ビジョン（仮称）のねらい（案）」（資料 3-3）

- ビジョンの発信先に下水道関係者だけでなく周辺分野の方々も追加すべきではないか。
- 民間企業に対する技術開発への期待を明確に発信すべきではないか。
- 技術的な支援（リーダシップ）等、国の役割を明確に、最初に記述すべきではないか。

■ 「21世紀社会における新たな下水道の姿と目標（案）」（資料 4-1）

- 5つのスローガンの名称は一般的で現実的な表現がいいのではないか。
- 上記の名称はうまくまとめられているのが、下水道が国土政策において、どのように貢献できるかというスタンスで記述すべきではないか。
- 「住民理解」というようなスローガンがあってもいいのではないか。
- 全国の市町村は状況が異なり、国民の多くはベーシックの部分に下水道の価値を見いだしているのではないか。
- 下水道事業主体の状況に応じてビジョンの活用の仕方を判断してもらえばよいのではないか。
- 最終的には「循環のみち」に向かうことが目的で、その中で3つの柱があるのではないか。
- 国外ばかり見ていると、足元をすくわれることになるのではないか。
- 現状認識、ギャップ分析がされていないので、内容が曖昧なものとなっているのではないか。
- 国民にとっての具体的なメリットが見えることが大切で、施策にはワクワクできる側面があるとよいのではないか。
- ビジョンでは数値目標、達成評価方法もイメージし、評価指標を早めに用意すべきではないか。
- 浸水対策は、将来的にも重要なので、ビジョンに示すべきではないか。
- ナレッジマネジメントの確立は、単なるデータベース作成でなく、多くの内容を含み、具体的に今後のロードマップが必要ではないか。
- 非常時はリスクの他に事故などきめ細かい議論が必要である。
- ベースとなる「持続可能性の追求」をしっかりと書き込むべきではないか。
- 下水道使用料の値上げなど国民負担があることをわかりやすく書くべきではないか。